

つと消える様に終る場合が多い。東北地方のことは語尾に連母音を伴って伸びながら終る。九州は暖かい

風土で元気がいいのか、語尾をしつかりしかも強調する様に、決めて終る。否定もはっきりしている。

「いりませんか」と言う間に答える時、普通は「はいいりません」となるところを「いいいりません」と答える人が多い。外国語的である。

日本語のルーツをたどるヒントになるかも知れない。他の地方の人が聞くと「ずい分はつきり言うネ」との印象を持ってしまふ。語尾で誤解を生むかもしれない。しかしこの特長も次第に薄れている様に思う。

また「話しことば」の早さと用法の混乱が「ゆれ」に拍車をかけている。「全然」を肯定に使う例や「れる・られる」の影が薄くなって来ているのは周知のこと。機関銃の様なスピードで一気にしゃべることから、高低の日本語アクセントが吹き飛んでしまい、平板化が著しい。

世代が違つと言葉の意味を採れない場合もある。

本来、「話しことば」は意味の逆転やゆれが起り易い。西鶴の東海道中膝栗毛の一節に「此三十年ばかり

あとのことで……」のあとは「前」を指している。その分野で一番の腕、第一人者、他の追従を許さない時

「独擅(せん)場」と言うべき所を「独壇(だん)場」と使う人の方が多くなっている。

別府大学に留学する学生も次第に増えているが、彼らは異口同音に、日本語がわかりにくい、と訴える。

「早すぎる、論理的でない、文法的におかしい、特にテレビでしゃべっている若いタレントのことばは日本語とは言えないのではないか」などである。本来、話しことばには文法はなく、変化も激しいものではあるが、日本語を母国語にしている私

達には傾聴すべき感想である。私達の話しことばは、仲間意識の中で交わされる、仲良しグループことば

ではないだろうか。日本の話しことばは私達が考えている以上に国際化の中に引き出されている。

生活環境の違いを越えて誰にも正

捨てる物のなかつた時代

— 環境破壊に 田心う —

後藤 重巳

甚だ極端な言い方だが、カラスの

鳴き声を聞かない日はあつても、「環境破壊」「自然保護」「産業廃棄物」「公害」などという文字・言葉を見聞きしない日はないと云つても過言ではない昨今である。

「使い捨ては美德」など一時流行つた言葉も、もはやそれ自体使い捨てられたが、「使い捨ては、文化のバロメータ」として、捨て物の量の多少が文化程度の高低を推し量る基準と考えられ、「多は高、少は低」とされる時代さえもあつた。しかし、この頃、そつした考え方も大きく変

確に伝わる言語表現が問われている。

(短期大学部講師)

わり始めた。

本来、物の少ない時代には、物を捨てるには余程の決心が必要であつた。岩波書店の『広辞苑』には「捨」の字の付く熟語を全部で、六十程収録しているが、その何れをとつて見ても、意味するところは、「不要になつたもの」「役に立たなくなつたもの」の意や、惜別の念をもつてなげうつ・犠牲を払つてなげうつなどの意となつている。

現代の河川海洋汚濁・環境破壊などの主要な原因には、生活排水の垂れ流し・農薬散布・車の排気ガス・

工場の廃液煤煙の他、森林の乱伐など様々なことが起因と考えられる。

これらの内、生活排水の垂れ流しを起因とする公害の占める比率は、決して低くない。

この生活排水としては、尿尿・台所排水・洗濯排水などが上げられる。

尿尿すなわち用便は、便所に排出されるが、この便所は古く「厠」と呼ばれ、本来は「川屋」であり、流水に流すものであった(李家氏)。

のち、「便壺」に貯える方式に変わったが便壺には容量的に限界があり定期的に「汲取」が必要とされた。

各地域下町の武家屋敷・町家の「汲取」は、近在農民が一手に行い、彼らは農作物に施すかけがえのない肥料として、益暮れに、若干のお礼の品を届けてまでして、尿尿を買ったものである。簡易な水洗式の便そうすらない時代にも、極めて合理的な尿尿の処理が行われていたのであり、たとえば江戸期、世界一の規模を誇った江戸の町を控えながら墨田川の

水が比較的清浄を保ち得た秘訣はここにあったのである。地方都市の諸河川や村落内を流れる小河川もこの例外ではなかった。

江戸幕府は、農村における農耕肥料の確保対策から「雪隠」(せっちん)を広く造るよう指導している。

一方、農民民家の「台所」には、流し先に大きな瓶や桶が埋め込められており、「洗い水」が貯められるようになっていた。農家の主婦は、米の磨ぎ汁・野菜の切り屑などは流し捨てずに、側に置かれた桶に入れ魚の滓など臭み物のみを流し捨てたものである。桶に入れた磨ぎ汁や野菜屑は、俗に「駄水」(ぞうみず)と呼ばれ、絶好の飼料として牛馬に与えられた。また、流し先に貯められた雑水は朝晩汲み取られて、畠作物の肥料として菜園に散布された。このようにして、尿尿も台所廃物も、周囲の環境を汚濁することなく有効に利用されたのである。

江戸期の豊前地方の農家屋敷の一

角には「灰屋」と呼ばれる土壁の建物があり、掃き貯めたゴミや全くの不用品を焼いて、その焼き灰を農耕用の肥料に利用していた。屋敷内のゴミさえ効能よく活用したのである。

農具が壊れば、補修に補修を加えて使用し、破れた野ら着は、当て次ぎを施して、とことんまで着古したものである。いよいよ着れなくなったものを、「案山子」が着用することもあった。今は死語同然になった「勿体ない」と言う言葉は、体験的に生きていたのである。

一昨年七月、大分県西部地方を襲った集中豪雨の被害は、自然の秘めた威力をまざまざと見せ付けるものであった。豊肥線は昭和三年に全線開通して以来、鉄橋が二ヶ所も流失したのは初めてのことであり、耕地・山林・道路橋梁の欠損など被害は未曾有の規模であった。この災害の原因については、様々の解説がなされ、河川奥地からの流木が被害をより大きくしたとも説かれている。し

かし、この災害は、洪水の折に、水を遊ばせる所謂「川除地」を無視した河川管理の拙さに帰結させることがむしろ妥当ではあるまいか。

河川流水量の少ない平常時の河川敷川除地は、まさに「勿体ない」土地であった。川除地には、砂れきの積もった所も少なくなかったが、上流から運ばれた土砂が堆積した肥沃な土地が多かった。しかし、こうした土地は、公共地で個人の私有は許されず、大洪水の折の遊水域となつた。また、多くの場合、河川の護岸施設は、流水の慣行に習った自然堤防が多く、大洪水の折、水流に抵抗しない方法がとられていた。

最近、土木工法の発達で自信を過剰した人間は、いわゆる「治水」の原理を誤解し、無闇に強固な護岸施設を設け、水流に対応しようとし、しつぱ返しを食らうようになった。また、橋梁の架設は、勿論、陥落流失のないように頑丈強固を原則に架設されたが、一方では「橋は流さ

れるもの」という考え方もあった。

地方の村々に架設された木橋は、「橋柅」に巨木を用いるため、洪水によって橋が陥落しても、用材の巨木が流失しない工夫がなされていた。

すなわち、「橋柅」の巨木の根方に丈夫なワイヤーを結びつけ、そのワイヤーの一方の端を、川岸の岩や大木の根元に結び、若し、その橋が流失しても「橋柅」は流れ残るような工夫を施す知恵を持っていた。つまり、大洪水の折には、川上から大小多くの流物があり、橋脚を洗って橋が流失する可能性の大きいことを熟知していたのである。

河川敷や河川の淀み・湾曲部は、流物の流れ留まるどころ、まさに「淀み」であり、村内で特権を持つ人は、流木をはじめとする「流物」を取得することが出来、この流木などを拾える権利は、極めて限られた家系にしか付与されず、権利のないものを羨ましがらせたものであり、一方で彼らは河川の掃除役を果たした。

ものを捨てると言う行為に対して

「拾う」と言う行為は、「毒買」や「貸借」と言う契約行為と平行して私達の周辺では、ごく普遍的に行なわれてきた。空缶拾い・ゴミ拾いなどと言う現代の美化活動の性質と異なり、「馬糞拾い」「屑鉄拾い」さらには「栗拾い」「椎の實拾い」「落穂拾い」は勿論のこと、ものを拾って「長者」になった話さえ少なくない時代さえあった。勿論、「物拾い」は、貧しい者の代名詞とも考えられましたが、本来、捨てることよりも賢い行為であったとも考えられる。かつての農村では、子供が一二尺の「屑縄」を焼き捨てようとする。「縄の長さだけ家が焼ける」と言われて戒められたものである。経験豊かな大人達は、一二尺の短い藁縄を美事に繫いで、長い縄を作り出す技術を持ち合わせていたのである。

自然の節理を心得ていて、河川の流物を取得する知恵、路上の馬糞さえ拾い集めて農耕肥料にしようとし

た知恵。こうした時代の社会には、自然破壊や汚濁の憂いは少なかったのである。

鍬の刃先が摩滅すれば、村の野鍛冶屋で刃を付け替え、釜・鉄瓶・風呂釜に孔があけば、巡回の鋳物師に補修を依頼し、戦後の遅くまで、アルミ鍋の小孔を塞ぐためのアルミの「鎮」が市販されていた。

このように考えて来ると、さして遠くない親達の世代までは、捨てる物は何もなかったような気がする。

大学周辺の「不燃物置場」には、

三月ともなると、新品同様の洗濯機・冷蔵庫・ベッド・タンスなどが、放り捨てられて山を成し、心ある人々を驚嘆させる。これら諸製品の製造のために、如何に多くの元資材が消費されていることだろうか。「親捨て」「家捨て」「村捨て」「国捨て」の世相の到来もさして遠くはないかも知れない。いや、その一部の現象は、既に顕れているのである。

(文学部教授)

有馬直純の逝去における殉死の問題

土口岡 義信

森鷗外の『阿部一族』は、寛永十八年(一六四一)、熊本藩主細川忠利の逝去に伴う殉死の問題を取り扱った歴史小説として有名であるが、これとよく似た事例が延岡藩有馬家でも起きているのである。

『国史大辞典』(吉川弘文館刊)

によると、殉死の風習は古来よりあったようであるが、特に武士の世になると、戦乱の中で家臣が主君に殉死するのは珍しいことではなかった。しかし江戸時代になり戦乱が絶えると、病死した主君のために追腹を切ることが美風として流行していたよ